

第1 台風に伴う海難の発生状況

1 青函連絡船洞爺丸の遭難から半世紀

我が国の海難史上最多の犠牲者が！

今から約50年前、昭和29年9月26日18時39分、青函連絡船洞爺丸(4,337トン、乗員乗客1,314人)は、台風15号が北海道渡島半島西方海上を北上する状況のもと、銅鑼の音に送られて函館港函館棧橋を離れ、青森港へ向かった。しかし、洞爺丸が出港したころには、既に函館湾は台風の右半円に入って大時化となっていたことから、湾内で錨泊して天候の回復を待つことにした。

洞爺丸は、19時01分両舷錨を投下して錨泊し、機関を使用して吹き荒れる暴風と湾内に侵入するうねりを凌いでいたが、20時00分ごろ最大瞬間風速が50m/sを超える暴風と波高6mに達するうねりによって走錨が始まった。間もなく、車両甲板に打ち込んだ海水が機械室にまで浸水して機関が使用できなくな

り、やがて函館湾七重浜沖合の浅瀬に乗り上げて転覆し、1,155人もの尊い命が失われた。函館湾では、この他にも4隻の青函連絡船が沈没し、洞爺丸を含めて合計で1,430人もの死亡・行方不明者が発生するという大惨事となった。(本海難の詳細は後述)

後を絶たない台風海難

我が国の海難史上最多の犠牲者が発生した「青函連絡船洞爺丸の遭難」は、台風海難の原点と言えるものであり、今日にも通じる数多くの教訓を残した。最近では、海上においても、テレビなどで最新の台風情報の入手・伝達が容易にできるようになったことから、大きな台風海難の発生は少なくなっていた。ところが、平成16年は、観測史上最多の台風が上陸し、錨地での風速が50~60m/sを超す極めて強い風が吹く台風もあったことから、例年になく台風による海難が大幅に増加した。

このような海難を少しでも減少させるため、平成16年に発生した台風による海難をはじめ、半世紀前の「洞爺丸の遭難」や最近における主要な台風による海難を振り返り、これらから得られる貴重な教訓を抽出してみることにする。



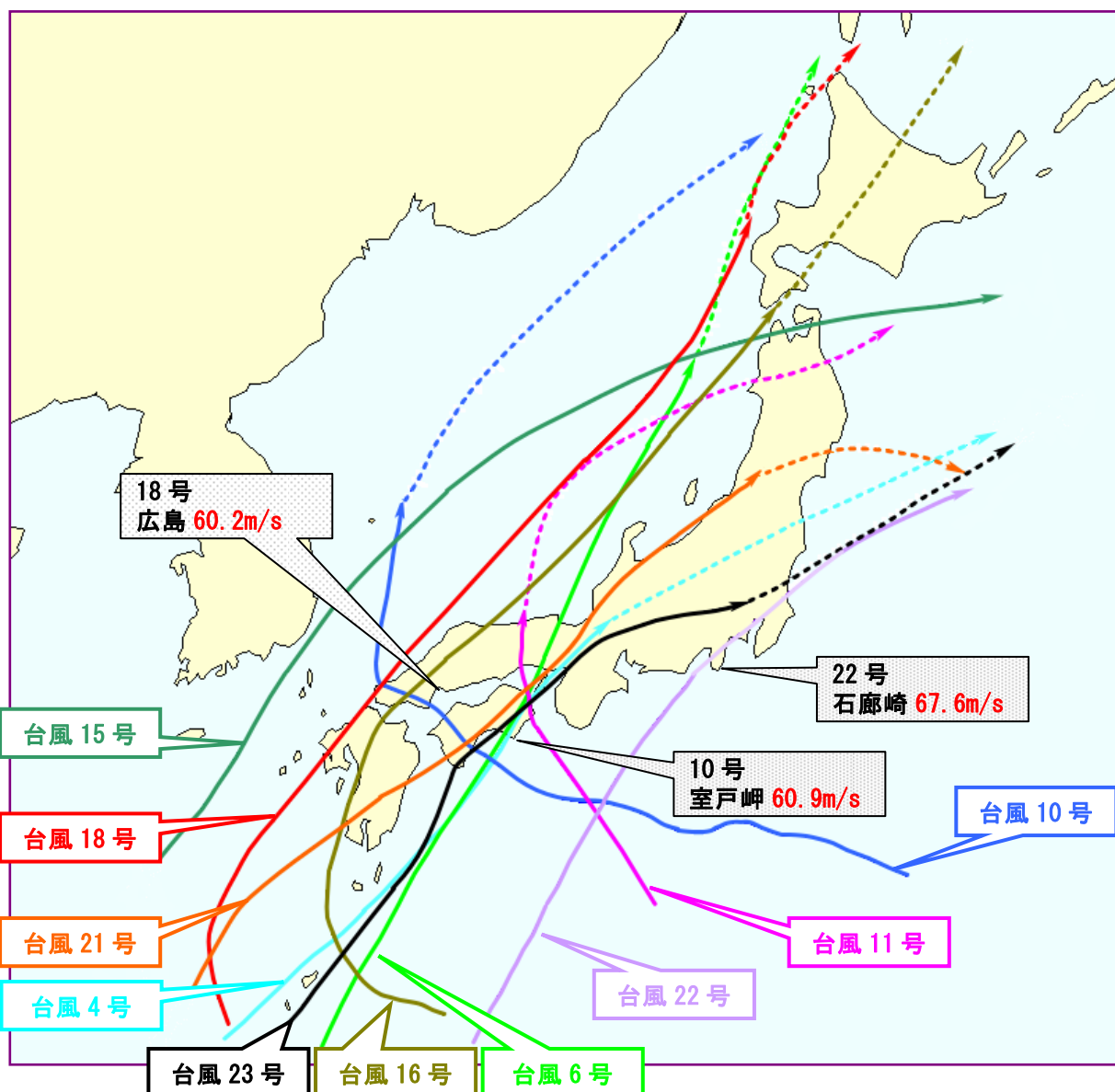
【在りし日の洞爺丸】



2 上陸台風の経路及び風速

60m/s を超える最大瞬間風速が！

平成 16(2004)年に上陸した台風は 10 個で、観測史上最多(平年 2.6 個)となり、うち 7 個の台風が瀬戸内海を通過し、室戸岬、広島及び石廊崎の各気象官署では最大瞬間風速が 60m/s を超えるなど、日本各地で暴風が吹き荒れた。



※実線は台風，破線は熱帯低気圧又は温帯低気圧を示す。

※期間は、日本上陸日から温帯低気圧などに変わった日，最大風速及び最大瞬間風速については各気象官署における最大の数値をそれぞれ示している。

台風	期間	最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)	気象官署
4号	6月11日～11日	29.2	51.5	宮古島
6号	6月21日～22日	43.7	57.1	室戸岬
10号	7月31日～8月2日	47.7	60.9	室戸岬
11号	8月4日～5日	20.3	29.8	潮岬
15号	8月20日～20日	27.1	48.7	厳原
16号	8月30日～31日	46.8	58.3	室戸岬
18号	9月7日～8日	33.3	60.2	広島
21号	9月29日～30日	31.5	52.7	鹿児島
22号	10月9日～10日	39.4	67.6	石廊崎
23号	10月20日～21日	44.9	59.0	室戸岬

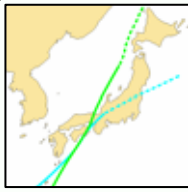
3 上陸台風による被害状況

10個の上陸台風が日本列島に大きな爪痕を

10個の上陸台風により、全国各地で土砂災害・浸水被害・建物の倒壊などが発生し、多くの犠牲者も伴った。

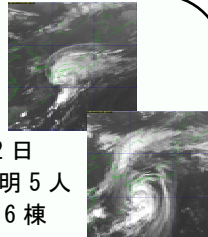


台風第10号による土砂災害
(徳島県那賀町)




4号・6号

6月10日～22日
死亡・行方不明5人
住家全・半壊6棟

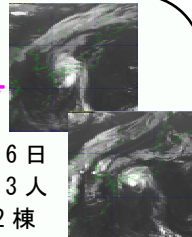


中部・近畿・四国地方に被害をもたらした。各交通機関への影響が出るとともに、徳島県では国道の一部が通行止めになった。




10号・11号

7月29日～8月6日
死亡・行方不明3人
住家全・半壊32棟

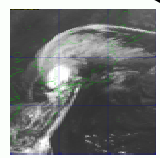


四国地方を中心に大雨となり、徳島県や高知県で山崩れ・がけ崩れや土石流などの土砂災害が相次いで発生した。




15号

8月17日～20日
死亡・行方不明10人
住家全・半壊105棟

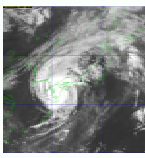


九州・四国地方で非常に激しい雨をもたらすと同時に、九州から北海道にかけての日本海側の各地で暴風が吹き荒れた。




16号

8月27日～31日
死亡・行方不明17人
住家全・半壊256棟

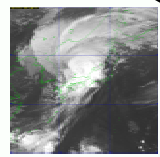


西日本の太平洋側で大雨をもたらし、香川県、岡山県、広島県など瀬戸内海沿岸の広い範囲にわたって高潮による浸水被害があった。




18号

9月4日～8日
死亡・行方不明46人
住家全・半壊1,650棟

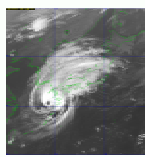


沖縄・九州・中国・北海道地方では、これまでの記録を更新する最大瞬間風速が観測されたところもあり、建物の損壊や倒木被害が各地で発生し、多くの方が負傷した。




21号

9月25日～30日
死亡・行方不明27人
住家全・半壊893棟

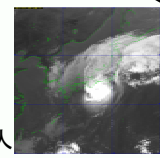


九州・四国地方を横断し、近畿・北陸地方を通過して東北地方へ進んだ。三重県や愛媛県でがけ崩れや土石流が発生し、多くの被害があった。



22号

10月7日～9日
死亡・行方不明9人
住家全・半壊435棟



台風はそれほど大きくはなかったが、中心付近は猛烈な雨や風を伴っており、東海地方から関東南部にかけて、がけ崩れなどの土砂災害、浸水被害、突風による被害をもたらした。



23号

10月18日～21日
死亡・行方不明98人
住家全・半壊8,836棟



大型の強い勢力で本州を横断したため、広範囲で河川のはん濫・浸水被害・土砂被害をもたらし、兵庫県、京都府、香川県を中心に全国で多くの死亡者・行方不明者が発生した。

4 海難の発生状況

台風18号による海難が最多！ 7個の台風が通過した瀬戸内海で全体の5割が発生

平成16年に上陸した台風による海難は、233件268隻(走錨船に衝突された錨泊船を含む。)で、死亡・行方不明者数は35人に達している。

台風別では、九州北部を横断して山陰沖に達した台風18号によるものが72件と最も多く、発生海域別では、7個の台風が通過した瀬戸内海が118件で、全体の5割を占めている。

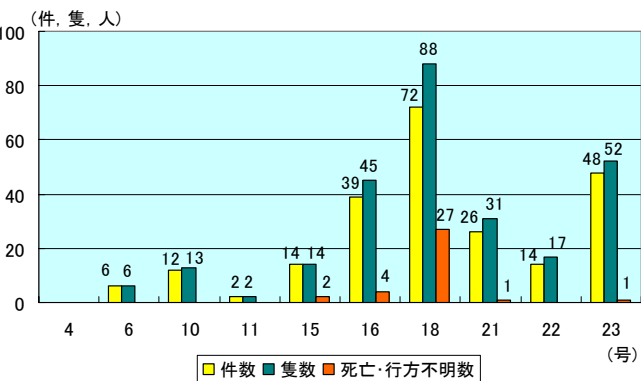


図1 台風別発生状況

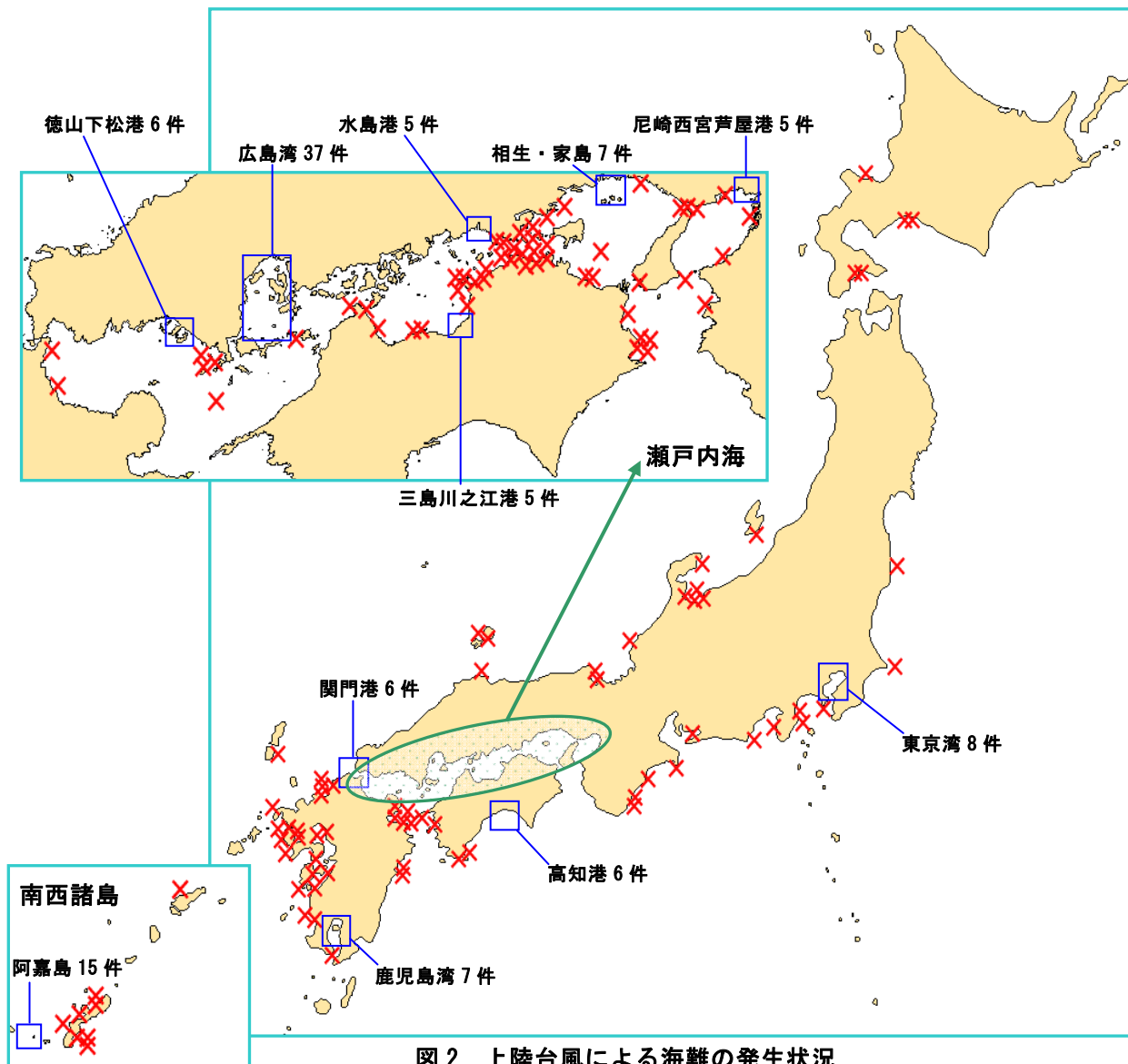


図2 上陸台風による海難の発生状況

5 台風18号と23号による主な海難

外国船の海難で多くの犠牲者が！

台風18号では、九州と中・四国地方が台風進路の右半円に入り、特に、瀬戸内海では長時間にわたって暴風が吹き荒れ、山口県笠戸島沖で錨泊中の貨物船トリ アルディアントが乗り揚げ、乗組員20人全員が死亡・行方不明となったほか、広島港内で岸壁係留中の貨物船ブルーオーシャンが沈没し、乗組員4人が死亡した。

また、台風23号では、富山湾で錨泊中の練習帆船海王丸が走錨して乗り揚げ、30人が負傷したほか、伏木富山港内で岸壁係留中の旅客船アントニーナ ネジダノバが、避難時機が遅れて離岸できなくなり、そのまま転覆した。



6 海難の内訳

走錨して岸壁に衝突や浅瀬への乗り揚げなど

台風海難を事件種類別にみると、「遭難」(大雨で流れ出した流木等にプロペラ等が接触して損傷したものなど)が102件(44%)と最も多く、次いで「衝突(単)」(岸壁係留中、強風により岸壁に衝突したものなど)が54件(23%)、「乗揚」(走錨して浅瀬などに乗り揚げたものなど)が32件(14%)となっている。

また、船種別でみると、貨物船が83隻(31%)、旅客船・フェリー49隻(18%)となっており、この2種で全体の半数を占めている。

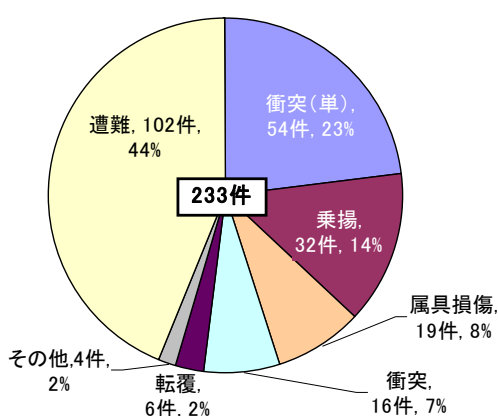


図3 事件種類別内訳

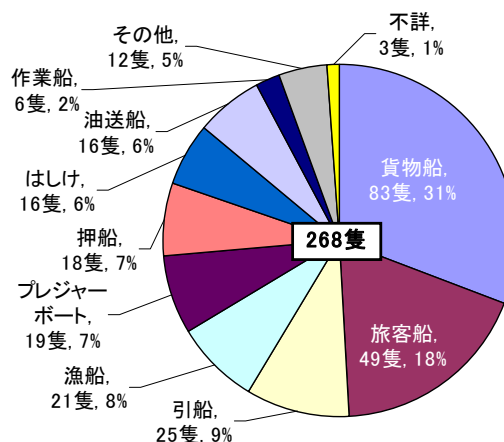


図4 船種別内訳

事件種類別にみる台風海難の主な態様

- * **衝突**
 - ・走錨して圧流され、錨泊中の他船と衝突したもの。
- * **衝突(単)**
 - ・岸壁係留中、強風により船体が岸壁に衝突したもの。
 - ・錨を使用して着岸作業中、強風で錨が効かず、岸壁に衝突したもの。
- * **乗揚**
 - ・錨泊中、走錨して岩場に乗り揚げ、沈没したもの。
 - ・港内で回頭中、強風に圧流されて浅瀬に乗り揚げたもの。
- * **転覆**
 - ・台風の接近で大時化となり、出漁中の漁船が転覆した状態で発見されたもの。
- * **属具損傷**
 - ・強風のため、マスト頂部のアンテナが折損したもの。
 - ・走錨して他船との衝突の危険が生じ、錨鎖を切断したもの。
- * **遭難**
 - ・大雨により流れ出した流木等の浮遊物にプロペラ等が接触して損傷したもの。
 - ・曳航索が切断して曳航物件が漂流し、浅瀬に乗り揚げたもの。
 - ・ランプドアが波浪の直撃で脱落したもの。

7 外国船の海難

外国船の全損海難に伴う死亡・行方不明者が突出

日本船と外国船を比較すると、日本船が254隻(95%)であるのに対し、外国船は14隻で全体の5%であるが、死亡・行方不明者数では、日本船の7人(20%)に対し、外国船は28人と全体の80%を占めており、外国船の全損海難に伴い、多くの死亡・行方不明者が発生している。

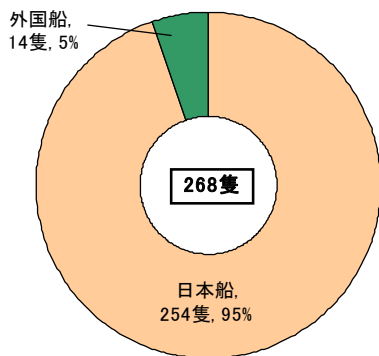


図5 外国船の割合

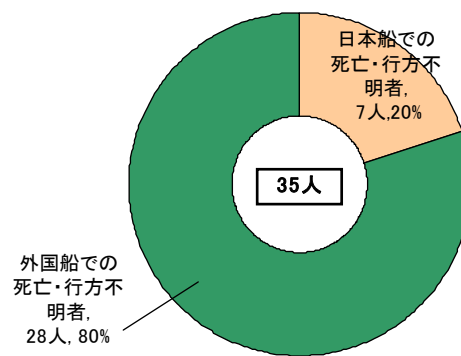


図6 死亡・行方不明者の割合

外国船14隻の内訳は以下で、船籍別では、パナマ共和国籍が4隻で最も多く、船長の国籍別では、台風縁遠いロシア連邦が4隻と最も多くなっている。

表1 外国船の内訳

台風	船種	船名	トン数	事件種	船籍	乗組員数	船長国籍	乗組員国籍	死亡・行方不明者数
15号	貨物船	ハイビスカス アイル	8,652	遭難	パナマ	19	フィリピン	フィリピン	0
16号	貨物船	ウィナー1	2,593	乗揚	パナマ	12	インドネシア	インドネシア	0
16号	引船	5005デキュン	119	衝突	韓国	5	韓国	韓国	0
16号	はしけ	(船名なし)	-	衝突	韓国	0	-	-	0
16号	貨物船	センチュリー ホープ	9,978	衝突	フィリピン	22	フィリピン	フィリピン	0
16号	貨物船	ビハン05	5,552	乗揚	ベトナム	20	ベトナム	ベトナム	4
18号	貨物船	フクオーシンNo.7	16,788	乗揚	パナマ	21	中国	中国, フィリピン	0
18号	貨物船	トリアルディアント	6,315	乗揚	インドネシア	20	インドネシア	インドネシア	20
18号	貨物船	ブルーオーシャン	3,249	沈没	カンボジア	18	ロシア	ロシア	4
18号	引船	HUA-JI	1,436	遭難	パナマ	18	中国	中国	0
18号	引船	コフジマル No.2	169	乗揚	ツバル	4	韓国	韓国	0
23号	貨物船	ニコライコロメイツェフ	1,200	遭難	ロシア	24	ロシア	ロシア	0
23号	旅客船	アントニーナネジダノバ	4,254	遭難	ロシア	62	ロシア	ロシア	0
23号	貨物船	ケープブレット	8,940	衝突	マーシャル諸島	19	ロシア	ロシア, ラトビア等	0

いろんな海難事例を見てみよう

— 海難審判庁ホームページで見ることができます —



URL <http://www.mlit.go.jp/maia/index.htm>

海難防止のための情報が盛りだくさん。きっとお役に立ってます。是非ご覧ください。

「海難分析集」 「地方版分析集」 「マイアニュースレター」